

当事者研究から考える在日コリアンの生きづらさ 在日コリアンの「自分の助け方」～その「効果」と「副作用」～ Tojisha-Kenkyu on Difficulty of Korean Minority in Japan.

○朴希沙・丸一俊介・高悠史

PAKU Kisa / MARUICHI Shunsuke / KO Yusa

サポートグループ “それが一人のためだとしても”

Support group “If it is only for one minority...”

Key words: 在日コリアン、生きづらさ、当事者研究

目的

日本には、韓国併合の後にその影響を受け、日本に移り住んだ朝鮮の人々にルーツをもつ在日コリアンが暮らしている。その数は日本国籍取得者も含めると100万人以上といわれる。しかし近年ではヘイトスピーチが問題になっているように、日本社会における外国人差別の現状には今なお課題も多い。また在日コリアンに固有の社会的困難が存在するということが、アイデンティティ研究や国連の勧告など多方面から指摘されてきた。しかしそのような社会的困難を背景として在日コリアンにどのような心理的問題が生じるのかを明らかにした研究は非常に少ない。

藤野(2007)は、「生きづらさ」の用法を整理し、生きづらさとは社会や環境、時代といった「ある状況の中でそれとの関係で生じてくるもの」であるとしている。このような生きづらさについて、当事者自身が考え、自分にあった生き方や暮らし方を模索するアプローチに当事者研究がある(べてるしあわせ研究所・向谷生, 2009)。本研究では、在日コリアンのサポートグループにおける当事者研究の試みを分析し、彼らの抱える生きづらさについて考察する。

方法

在日コリアンを主な対象としたサポートグループ「それが一人のためだとしても」においてなされた当事者研究のエピソード分析を行なう。

結果

エピソード分析から、在日コリアンの生きづらさの理解に示唆を与える以下のような要素が抽出された。

- ① 当事者が抱える生きづらさには、在日コリアンとしての自分が周囲の人間に理解されず、話せる場所や人がほとんどいないという「つながれなさ」が関係している。
- ② このためか、当事者に共感的理解への渴望(「渇き」)が見出された。
- ③ その渴望を「潤す」ために、様々な対処行動をとる(異性への依存など)。「対処行動」には一時的な自尊感情の回復、自身の苦勞への共感的理解が得られるなどの効果・効用がある。
- ④ しかし本人にはそれが対処行動であると意識されていない場合が多く、むしろネガティブなパーソナリティの問題として認知されている。その結果自尊感情の低下(恥ずかしい、やめたいのにやめられない)等の「副作用」が生じる。

⑤ 自尊感情の低下は新たなつながれなさの原因になり、生きづらさを再生産する悪循環が生じる。

⑥ このような悪循環の背景には、在日コリアンであることが関わる日々のストレスや緊張を話せる場がコミュニティに存在していないことが関係している。

考察

今回の研究は対象者が限定されているという限界があるものの、以下のような援助モデルの構築へとつながる可能性が示唆されている。

① 生きづらさの中核的要素としてのつながれなさを認識するプロセス(当事者研究)によって、「やめたくてもやめられない恥ずかしい私」から「生きづらさやつながれなさの中で頑張って自分を助けてきた私」へとセルフイメージの転換が起こる。これには、自尊感情の低下など副作用を緩和する効果がある。

② 対処行動は方法であり、目的ではないことがわかることで、より副作用の少ない助け方へと対処法を広げていく可能性が生まれる。

③ より副作用が少なく、より効果がある助け方として、
・コミュニティの中に在日コリアンの抱える生きづらさやつながれなさへの共感的理解のある人や場所を作っていくこと(資源の質の向上)。

・在日コリアンへの理解は希薄であっても、他の何かで自尊心が回復したり、自己効力感のもてる人や場所を本人のストレンクスを活用して作っていくこと(資源の量の確保)。ただし、在日コリアンとして攻撃されないことが資源の最低条件となることや、「そこしかない」わけではなく、「いろいろあるうちの一つである」と思えるほうが、依存的になりやすく、副作用が少ない。

・人や場所に依存的になる場合(「渇きを潤す」「泥水をすする」)でも、「自分の助け方」として受容していく方が、コントロールしやすく、副作用が少ない。ただし、それが自分の助け方であることを話しあえたり、共感し合える関係性があることで、自己受容が促進される。

参考文献

- 藤野友紀(2007). 「支援」研究のはじまりにあたって—生きづらさと障害の起源—子ども発達臨床研究(1), pp45-51.
- べてるしあわせ研究所, 向谷地生良(2009). レッツ!当事者研究1 NPO法人コンボ, 千葉.